

## 第26回「日本絵本賞」選考報告



松本 猛

(第26回「日本絵本賞」最終選考委員長)

4月9日、第26回「日本絵本賞」(主催：(公社)全国学校図書館協議会、協賛：(一社)松岡マジック・ブック・ヘリテージ(申請中))の最終選考会が行われ、4点の授賞作品が決定した。

第26回は、2020年1月から12月までに刊行され、全国SLA選定委員会で選定された絵本994点(うち翻訳絵本316点)のうち、全国SLA絵本委員会によって選ばれた「第26回日本絵本賞最終候補絵本」30点(うち翻訳絵本14点)が対象となった。

最終選考会では、5名の最終選考委員による事前審査を基に、討議と投票を行った結果、「日本絵本賞大賞」は、該当なし。「日本絵本賞」には、『こどもたちはまっている』『このかみなあに? : トイレットペーパーのはなし』『ぼくがふえをふいたら』の3点、「日本絵本賞翻訳絵本賞」には『虫ガール：ほんとうにあったおはなし』が選ばれた。

### 日本絵本賞講評

『こどもたちはまっている』は各選考委員の事前評価でも高い支持を得た作品。この絵本には、いわゆる物語はない。ほとんどの見開きの左ページに「こどもたちはまっている」という言葉が入り、右ページには「ふねがおるのをまっている」「ロバがくるのをまっている」「かもつれっしやがくるのをまっている」「あめあがりをまっている」などという言葉が入る。画面には言葉に対応した船やロバや貨物列車などの形象が描かれるが、基本的に脈絡のない場面が続く。しかし、連続する画面には何らかの視覚的関連がある。たとえば、「ふねがおるのをまっている」の画面には海に小さく船が描かれているが、前景の窓辺には中東と思われる民族衣装をまとった人形と、その後ろに馬のような置物がある。その形象が、次画面の「ロバがくるのを

まっている」の中でロバをひいて歩く人物につながる。画面の連続性は形象だけでなく、構図や色調などでも展開され、時には、いくつかの画面を超えて共鳴する場合もある。全体を貫く連続性は、画面を上下に分割する線が存在である。それは水平線だったり、窓枠だったり、道だったり、鉄橋だったり、布団だったり、テーブルだったりもするが、基本的な構図の類似性は維持される。全体の構成では、最初にまばゆい陽光の中で描かれた部屋が終盤で再び



『こどもたちはまっている』  
荒井良二/著  
(亜紀書房)

現れ、夜の光の中に描かれる。すると脈絡なく描かれていたように見えていた一連の絵が、地球上の各地の一日の出来事のようにも感じられる。この絵本は、一点一点は独立した絵でありながら、言葉がリズムを刻み、形や色や構図がそれぞれの流れを展開し、音楽で言うポリフォニー(多声音楽)のような効果を生み出し、重厚な響きを持った世界を創造した。荒井良二が絵本表現のあらたな可能性を追求した作品と言えるだろう。

『ぼくがふえをふいたら』は夕暮れの中で少年の笛の音が幻想的な草原の世界を生み出し、登場した動物たちが奏でる音楽を、うごめく色彩と夢幻的な動物の動きで表現した絵本。「サルが まるたを たいたたら」という言葉がある暗闇の場面で、サルはグリーンとイエローで描かれる。次の画面ではサルを描いた同じ色調が全面に展開し、ヤシのような高木を下から見上げた構図が現れる。空中をシルエットのサルが飛び交い、水玉が空から降り注ぐ。「タタ」という文字が画面に散らばり、「まるで あめの おちる おと」という言葉が入る。同様にガゼル、クマ、いぬとそれぞれのシーンが展開し、最後は全部が一つになって色が弾ける。音が消え再び闇の世界が現れ「からだを ながれる おとがきこえる」という言葉で終わる。この絵本も、いわゆるストーリーはなく、音の世界を色彩と造形でどこまで表現できるかに挑戦した作品。作者の阿部海太はまだ30代半ばであり、若手作家のパワーと情熱のほとぼしりを感じさせる。

『このかみなあに? : トイレットペーパーのはなし』の表紙はトイレットペーパーをイメージさせるかなり横長の白地に青のタイト

ルスペースが入る。裏表紙も白地で、目を凝らしてみると「ありがとうございます」とプリントされた芯の写真がさり気なく置かれている。この絵本の面白さは、本来の使用目的とは違う部分からトイレットペーパーを解明するところにある。冒頭は長さを実感できるように4画面を使い、ページをめくると、柔らかさや、こよりにしたときの強さや、保水力など驚きの発見が続く。この絵本はトイレットペーパーを調査し、科学すること、考えることの楽しさを盛り込んだ、新しいタイプの科学絵本と言えるだろう。絵本のつくりも、写真もよく考えられており、見事なデザイン感覚でまとめられている。読むたびに新しい発見があるほど工夫に工夫を重ねた作品。作者の谷内つねおはアートディレクターであり、紙の彫刻も作り、子どもたちを相手に紙を素材にしたワークショップも行う人で、その経験の蓄積が、この楽しい科学絵本を生み出すことにつながったのだろう。

翻訳絵本賞の『虫ガール：ほんとうにあったおはなし』は虫好きの少女の自伝的ドキュメンタリー絵本。幼稚園までは、虫好きの女の子を誰もが自然に受け入れていたのに、小学生になると「変な子」としていじめの対象になる。心配したお母さんが、昆虫学者のグループに、だれか娘の「虫ともだち」になつ

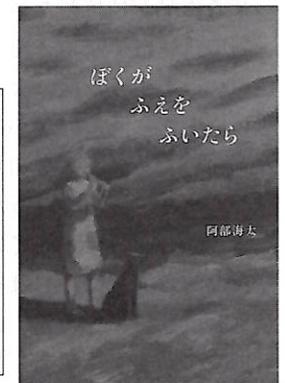
てくれる。この絵本は、虫好きの少女の自伝的ドキュメンタリー絵本。幼稚園までは、虫好きの女の子を誰もが自然に受け入れていたのに、小学生になると「変な子」としていじめの対象になる。心配したお母さんが、昆虫学者のグループに、だれか娘の「虫ともだち」になつ

(第26回日本絵本賞)



『このかみなあに? : トイレットペーパーのはなし』  
谷内つねお/さく  
(福音館書店)

(第26回日本絵本賞)



『ぼくがふえをふいたら』  
阿部海太/作  
(岩波書店)

〈第26回日本絵本賞翻訳絵本賞〉



『虫ガール：ほんとうにあったおはなし』  
ソフィア・スペンサー、マーガレット・  
マクナ马拉/文、ケラスコエット/絵、  
福本友美子/訳  
(岩崎書店)

てくれない  
かとメール  
をすると、  
世界中の昆  
虫学者から  
メールや手  
紙やビデオ  
が届く。そ  
のこを知  
ったマスコ  
ミが取り上  
げると、少  
女はテレビ  
にも出演し、

元気になって昆虫学者を目指すようになる。  
この絵本自体も、その情報を知った子どもの  
本の作家が、11歳になった少女に協力を申し  
出て制作された。最後には少女が好きなたく  
さんの昆虫についての、楽しく専門的な解説  
もある。軽やかでリズムカルな絵が、小気味  
よい訳文と相まって展開する。少女を応援す  
る学者たちの心情も伝わり、好奇心を持った  
子どもをサポートする大人の役割についても  
考えさせられる。子どもの中には、自分と重  
ねて現在進行形の絵本として読む子もいるだ  
ろう。新しい試みの絵本。  
(まつもと・たけし=絵本・美術評論家、ち  
ひろ美術館常任顧問、横浜美術大学客員教授)

選評 (第26回日本絵本賞最終選考委員)

●伊藤たかみ



大賞なしという結果は今年が不作だったせいではない。もう一作読みたい、見たいと思わせる作品が拮抗した結果だ。

阿部氏『ぼくがふえをふいたら』の音楽に色をつけたような絵のよさは、どう説明したらいいのだろう。何かがぞわっとくる。どこかがいい。その正体を知りたくて、もう一作見たくてたまらなくなった。

『こどもたちはまっている』は、さすが荒井氏だけあって、もはや講評するのも野暮かもしれない。この先、氏がどういう方向を目指すのかますます楽しみになる。

ほか2編はトイレットペーパーに昆虫と、科学寄りの絵本。実験法にせよ昆虫の種類に

せよ、昔よりライトになった視点が今風だった。

(いとう・たかみ=作家)

●福田美蘭



『こどもたちはまっている』の壮大な地平線に対し、小さく点在する子どもたちのささやかな日常の喜びは、幻想的であることで一層、幸せな明日を想い描く切実な願いとなっている。スピード感のある強い筆跡の荒々しさの中に、複雑な現代が共鳴する切迫感があり、その中で“まっている”ことの希望が、光を感じる色彩の美しさに結晶している。『こ

のかみなあに? : トイレットペーパーのはなし』は身近な紙の特性から、視点を変えて物を見ることで広がる世界の中に、学ぶ意味を伝える。『ぼくがふえをふいたら』は音の要素を視覚に置き換える意欲作で、独自の素朴な表現が強く印象に残った。『虫ガール：ほんとうにあったおはなし』は温かくやわらかな水彩に続く本人の文章が、実話であることに心が動く良質な作品。  
(ふくだ・みらん=画家)

●小林 功



『こどもたちはまっている』は地平線や水平線の向こう側で待っている子どもたちの未来が幸福なものであることを確信する。作者の世界観、子ども観がみごとに結実している。

『このかみなあに? : トイレットペーパーのはなし』は横長の判型、用紙の質感、文字フォントに至るまで計算し尽くされた絵本。身近なもの不思議が好奇心を刺激する。

『ぼくがふえをふいたら』は、心の奥底に眠っていた根源的な不安が呼び覚まされるような色彩が印象的。多くを語らないリズムカルな文章は想像力を広げてくれる。

『虫ガール：ほんとうにあったおはなし』は虫が好きな女の子ソフィアを理解し、応援してくれる家族や昆虫学者たちの存在に励まされる。

このほか『つかまえた』(偕成社)、『水上カーニバル』(のら書店)、『しあわせなときの地図』(ほろぷ出版)などが心に残った。

(こばやし・こう=全国学校図書館協議会絵本委員会委員長)

●小塚昌弘



今回の候補作は全体にノンフィクションや、創作であっても現実の事件や情報をモチーフとするものが目立った。その中で『こどもたちはまっている』は水平線の見える構図、ビビッドな色使い、朝→昼→夜と変化する構成と、絵本本来の魅力にあふれていた。また『ぼくがふえをふいたら』は幻想的な絵柄や擬音語の散らし書きなどを駆使して独特の世界を感じさせる。『このかみなあに? : トイレットペーパーのはなし』は紙としての特性を横長写真で見せるため、18×31cmの変則の判型を採用し、効果的だった。

翻訳では、入賞は逃したが、米国でムスリマ(イスラム教徒の女性)として生きる少女の意志を描いた『ねえさんの青いヒジャブ』(BL出版)が強く印象に残った。

(こづか・まさひろ=読書推進運動協議会事務局)